9 千住宿～草加宿

東京都足立区　埼玉県草加市

保木間 ～ 谷 塚

（ 歩行距離 1602m 20分 ）

歩く地図でたどる日光街道

http://nikko-kaido.jp/

JZE00512@nifty.ne.jp

火焙り地蔵

⑦火焙り地蔵

奉公に出ていた娘に千住掃部の宿の実家の母危篤の知らせがきて、主人に暇を願いでたが許されず母に会いたい一心で火をつけ火あぶりの刑となった。
村人は娘を哀れみに思い供養の地蔵を建て、「安政五年申天五月二十四日」と刻まれている。昔この辺に刑場があったといわれている。

元旦の浅間神社

③富士浅間神社

富士山の神霊である木花咲耶姫命を祭る。「瀬崎村なる浅間神社に参詣す。手洗いの池とて清泉なり。石の鳥居に…」（上野下野道の記）
天保13年（1842）に冨士講が開かれ、本殿裏には富士山を模した小山がある。江戸時代、富士山参詣の流行からこの地方に繁栄した布晒業者によって造営された。
本堂は軒唐破風、千鳥破風でみごとな彫刻がある。

①水神宮

風土記稿に「今社傍に二畝許の沼あり、土人水神ガ池と云う。此辺の水殊に清冷にして、煎茶の売家あり、人これを水神カ茶屋と云」とある（『足立の史話』）。| 今となっては沼もないし、ましてや茶屋などあるわけもないのだが、この沼には水神伝説が残る。
昔、このあたりに小宮某という元北面の武士が住んでいた。ある日、釣りをしているとき、森より蛇が襲う。腕に自信の小宮某は蛇を切り殺す。が、毒臭に冒され日ならずしてなくなる。小宮某を祀るために榎が植えられ、蛇の霊を祀って水神社とした、と。もとより、この小宮榎、現在は跡かたも、なし（『足立の史話』）。
道の右側に「水を売る茶やあり」（日光道中行程記安見絵図）

coffee time

毛長神社の伝説

大きな沼のほとりの長者の家に髪の美しい娘がいた。沼をへだてた舎人村の長者の息子と婚約したが、病がはやり婚約が解消され、娘は沼に身を投げた。髪だけが流れ着いたので毛長神社を建てた。
御神体は女性の髪の毛であることは、諸記録・土地の伝承によってこれを知ることができる。髪は素盞嗚尊の妹姫のものとも、村の長者の娘のものとも云われている。神体の髪に関する伝承は諸説あって一様でないが、「女の長い髪」であることは一致する。髪の毛を神体とする神社は全国でも稀らしい。本県では、おそらくこの毛長神社一社だけではなかろうか。その意味でこの神社の存在とその伝説の継承されていることは、貴重なものといえる。
(草加市新里町342。水神橋から歩いて29分2337m)

⑧河内堀

かつて草加には、「辰井堀」という、幅1.8mほどの用水があり、川口市から苗塚町に入り、西町を経て、谷塚町で河内堀が分流し、日光街道吉町5丁目交差点には、「火あぶり橋」があったという。河内堀は伝右川に合流しさらに綾瀬川に合流する。

⑤谷塚駅の由来

海抜3.45mで埼玉県では最も低いところの駅です。「谷」は(やつ)とか(やち)と呼ばれ低い土地をさし、「塚」は近在に塚が多かったために村名となっていました。村名を駅名にして開設した当時は、桑畑であった駅周辺も、道路が新設整備され商店が建ち並び、高層ビルも建設されるなど、大きく変貌(へんぼう)をとげています。開設は大正14年（1925）10月

隅田川からずっとつづいた足立区とお別れして埼玉県に入る。

④善福寺

草むれやささなみよする瀬崎村
元禄十六年（1703）一月、結城（ゆうき）藩の家老水野織部長福が、「右に浅間の社あり。善福寺という寺見ゆ。返り筋に小板橋あり。一里山有（草加の一里塚の事）小板はしあり。かしこを見やれば既に、千住より二里八町にて本馬七くゝ、半駄はなもしといふ草加の伝舎なり。宿の入口に左の方に権現の宮というほこら又地蔵堂あり。因縁いかゞぞや。町並にいりてふさいじといふ寺あり。町すぢに小板橋二ケ所あり。宿はずれの茶店にて午憩す。

金仏橋　日光街道から300m程入ったところに金仏橋という小さな石の橋がかかっている。今はカナブツ橋とよばれているが、かってはカネツキ橋とかカネツ橋と呼ばれていた。由来は念仏講の人達が貯めた金で架けた橋。あるいは火あぶり橋で処刑された人を供養するためこの橋を鐘を叩きながら渡ったという。

⑨条森稲荷神社

倉稲魂命を祀る。創建年代不詳。

⑥木綿生地晒工場

このあたりは、旧瀬崎村の地場産業である晒工場が幕末以来、林立していた。広い草原に互い竿を差し、純白に晒した布を掛けて干すまばゆいばかりの光景が日光街道の風物詩であった。明治34年(1901)には25軒あった。　晒工場の一角に昼間新左衛門の墓があり、将軍吉宗の鷹狩りの時の休息所として同家があったと記してある。

2　草加宿

「此宿前々は南草加村（現在の氷川町・西町）笹吉原村（吉町）原嶋村（原町）立野村（花栗町から氷川町）宿篠葉村（弁天町）与左衛門新田（草加2丁目から氷川町）弥惣右衛門新田（松原団地）北草加村（栄町から草加3丁目）谷古宇村（中根町・松江町から神明2丁目）九ヶ村に候処、慶長年中（1606）より九ヶ村組合一宿に相成、草加宿と相唱候由」（日光・奥州・甲州道中宿村大概帳）
日本橋から数えて2番目の宿場である。慶長6年（1601）に徳川家康によって整備された。当時、この一帯の街道筋は沼地が多かったため、これを迂回し花俣（現在の東京都足立区花畑）から八条（八潮市）に出て古利根川と元荒川の自然堤防に沿って越ケ谷に至る経路を取っていた。
「草加の西乃かたにうぬまとて広さ23里の池ありしに今はたとなりしよし　池のかたち少し残れり」（日光道中行程記安見絵図）
慶長11年（1606）になって、大川図書（ずしょ）が先頭に立ち、現在の旧街道筋にあたる低湿地を土、柳の木、葦などの草で埋め固め、千住-越ヶ谷間をほぼ一直線に結ぶ新往還道を築き上げた。この新道の工事の完成に当時の将軍徳川秀忠は喜び、「草を以て沼をうづめ、往還の心安すきこと、これひとえに草の大功なり。このところ草加といふべし」と下知した。これが「草加」という地名の由来と言われる。
天保14年（1843）調査の『宿村大概帳』によると、南北12町（約1.3km）の規模となり、本陣1軒、脇本陣1軒、旅籠67軒（大2、中30、小35）、人口3,619人（男1693人、女1926人）、駄賃・賃銭　荷物一駄・乗掛荷人共77文、軽尻馬1疋51文、人足1人39文であった。これは、同じ日光道中の宿場のうち、城下町に併設されていた宇都宮宿と古河宿を除けば、千住宿、越ヶ谷宿、幸手宿に次ぐ規模であった。草加は天明4年（1768）、明治3年（1870）の2度の大火にあい、今の街並みは最古のものでも明治の大火以後の建物である。

coffee time

奥の細道

「耳にふれていまだめに見ぬさかひ、若生（もしいき）て帰らばと定めなき頼みの末をかけ、其日漸く草加と云宿にたどり着けり」第一夜が草加宿であったように書いているが、同行の曽良の随行日記によると「廿七日夜、カスカベニ泊ル。江戸ヨリ九里余」草加から2つも先の宿に泊まっている。

②毛長川

毛長川は草加市と足立区の境界をなす一級河川。川口市安行地区に発し、足立区花畑で綾瀬川に注ぐ。見沼代用水の落とし水を流す排水路的な川で、両岸には縄文期から平安期にかけての遺跡が集中している。かつては「毛長落し」「毛長堀」と呼ばれた狭い川であった。明治期には下肥を運ぶ舟運にも利用されたことがあった。

毛長川